

昨年2014年のクリスマスを前にした12月15日、ローマ郊外アウレリアの聖ヨハネ教会を訪問したローマ法王フランチェスコはクリスマスについて述べた。「クリスマスは神の子イエス・キリストの誕生を祝う日である。しかし最近では習慣になってしまったのか、キリスト誕生を祝うことを忘れ、親族が集まり、1年中で1番の御馳走を食べることだけに集中しているようだ。注意しよう。」

その日、教会には61人の病人、身体障害者が集った。法王は、彼らとその引率者に対して「皆さんの忍耐と教会に捧げられる愛に感謝している。平和の気持ちと神の喜びをもって前進して行こう」と呼びかけた。

さらに法王はキリスト教徒の「喜び」について述べた。「世の中には、神に感謝を捧げることを知らない人間が沢山いる。その人たちは常に何か不満を探している。聖者とか聖女と言われる人は、葬儀の時のような困りきった顔、悲しんだ顔をしない。聖者はいつも喜びの顔をしている。万が一、苦しみの中にあっても、平和の顔をしている。キリスト教徒が苦虫を潰した顔をするのは、他のキリスト教徒にも悪影響を与えるものだ。」

また、教会の中における行為をしっかりと心に治めるように促している。「今まで、教会の中で、泣く子がいれば、その子を教会から追い出すようにしていた。小さな子の泣き声は神の声なのだ。それゆえ、泣く子を絶対に外に追い出すな」と述べている。

この教会はジブシーたちを歓迎しており、ジブシーたちと教区教会との関係が強固な絆で結ばれている。その日も参列していた40人のジブシーたちに向けて、法王は「教会はあなた方の近くにいる。常にあなた方を歓迎している。特に、あなたがたは近くにいる。希望を失ってはいけない」と述べた。

このような話は、今まで歴代のローマ法王から聞いたことはなかった。これを聞いて、まるでお道のお話を聞いているような気分になった。

ローマの墮落

昨年末、ローマの政界、財界を揺るがした事件が起きた。それはローマがマフィアの侵入をゆるし、マフィアの思いのままに動いたことである。マフィアはローマの政界の右翼にも左翼にも浸透して、金をばらまき要人を買収していった。その中には、前市長のアレマンノも含まれ、市議会においても、右、左を問わず多くの市議がこのマフィアの動きに同調したようだ。ローマの大司教でもあるローマ法王はこのような動きを憂慮して次のように述べている。

今回の墮落のような大きな出来事は、精神的、道徳的に生まれ変わるために、誠実で責任ある改革を要求している。これは、正しく、結束した町、すなわち、貧しき者、社会の底辺にある者が我々の心配の中心にあるような町を築くことを教えているのだ。

また、厳しい表現でこのようにも言う。

一つの社会が貧者や抑圧された者を無視するとき、何らかの罪を犯すようになるし、マフィアに同化するようになる。そのような社会は貧に向かってくし、自由を失い、“奴隷のニンニクとタマネギを好むように”なるし、自分のエ

ゴの奴隷になり、臆病な奴隷になるのだ。我々は自問自答しよう。この町で、この地域社会で、我々は自由人なのか、奴隷なのか、我々は塩なのか、光なのか、それとも酵母菌なのか、それとも我々は既に精彩のない者か、気の抜けた者なのか、互いに敵対する者なのか、気を失った者なのか、取るに足りない者なのだろうか、意欲を失った者だろうか。

マフィアは法王にとって最大の敵でもある。昨年法王はマフィアは全員破門だと宣言した。ローマがマフィアとの繋がりを断ち、いかに立ち直るかが注目されている。結局これはローマのみならず、イタリア全体がいかに改革され得るかという問題である。

法王の司牧の旅

法王の本年の司牧の旅の日程が発表された。今年最初の外国への司牧の旅はスリランカとフィリピンである。これは1月12日から19日までである。7月26日から31日までにはポーランドを訪問することになっている。続いて8月になるだろうがフランスを訪問。特にパリとルルドを訪問する予定である。9月22日から27日までにはアメリカ合衆国を訪問する。ニューヨークの国連本部で演説し、フィラデルフィアの「世界家族」会議に出席した後、ワシントンを訪れる。最後にパラグアイへの司牧の旅が11月15日に予定されている。

その他、日程は決まっていないが、ウガンダ、メキシコ、スペイン訪問が取り沙汰されている。

イタリア国内では、3月21日にボンペイとナポリ、6月21日にはトリノを訪れる。聖骸布を愛で、さらにサレジオ会の創始者ドン・ボスコの生誕200年祭に出席するためである。

新枢機卿任命される

新年2015年に入り、1月4日のアンジェルスの際に、法王によって新たに任命された20人の枢機卿の名前が発表された。そのうち15名は法王選出の選挙コンクラーベに出席する権利を持ち、残り5人は80歳を超えている為にコンクラーベには参加出来ない。新しい枢機卿の出身地は実に14カ国におよぶ。その中には遠隔の地であり、カソリック信者が僅かに1万4千人であるトンガのパティタ・バイニ・マーフィも含まれる。彼は54歳で、最も若い枢機卿となる。さらに、ニュージーランドからジョン・アッチレイ・ディウが選ばれている。アジアからは今回も日本人は外れたが、ベトナム、タイ、ミャンマーからそれぞれ一人ずつ選ばれている。ヨーロッパでは、ポルトガル、スペイン、フランスから一人ずつと、イタリア人二人が選ばれている。その他珍しいところでは、ウルグアイ、パナマ、エチオピア、大西洋の孤島カーポ・ヴェルデからそれぞれ一人ずつ選ばれている。

枢機卿の数はこれで228人となった。そのうちコンクラーベに参加出来るのは125人である。

国別で枢機卿の数が多いのはイタリア26名、スペイン、フランスがそれぞれ5名、ドイツ、ポーランドが4名であるが、コンクラーベに参加出来る125人のうち、欧州出身者は57人と半数を割っており、次回のコンクラーベにおいて、誰が法王として選出されるか、予測が難しくなっている。